熊本地震救援①　～ホスピタル dERU を熊本県南阿蘇村に展開～

2016 年 4 月 14 日の熊本地震の前震でも、いったん緊急医療チームの派遣体制を整えていた当院は、同 16 日に発生した本震に対しても直ちに準備し、当院が持つホスピタル dERU（domestic Emergency Response Unit　フィールドホスピタル）のうち、外来棟、手術室とレントゲン室を計 3 台のトラックに積み、マイクロバス 1 台を加えた計 4 台の車両で、18 名の職員と共に出発しました。

初動班が九州に向かって中国道を走行中に、当院国際医療救援部は日赤福岡県支部、及び同熊本県支部の災害対策本部と連絡を取り、目的地を南阿蘇村に決定しました。というのも、熊本に近い県の多くの医療チームが、すでに現地に到着しつつあり、そのほとんどが熊本市に参集していました。地理的に遠い大阪から熊本市に入っても、展開場所もニーズもないのではということと、阿蘇大橋が崩落しており、いったん熊本市内に入ったチームは容易に南阿蘇村に移動できない状態であったためです。初動班は夜半に福岡で一泊し、夜が明けてから大分側から南阿蘇に入りました。到着後、当院の重装備をどこに展開するかを地元の保健師さんたちと相談し、刻々と変化する状況もあって設営場所が二転三転しましたが、最終的にはアセスメントも行って南阿蘇村で最も被害が大きい長陽地区の避難所となっている、南阿蘇中学校の体育館前に設営することが決定しました。無事、外来棟と手術室そしてレントゲン室の設営が終わり、診療を開始したのは 19 日午前でした。

外来棟などの設営状況

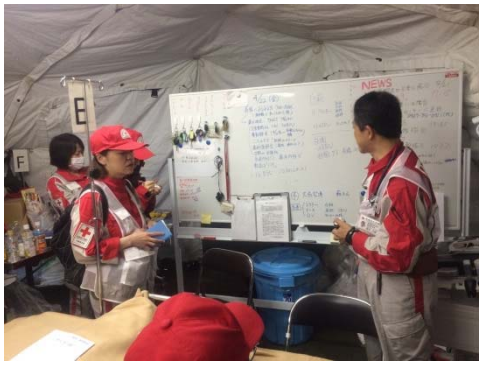
診療の様子

長陽地区は、前述のように南阿蘇村で最も被害の大きかった地区で、なおかつ唯一の医療機関であった立野病院が倒壊して閉鎖されているという厳しい状況にありました。つまり当院が持ってきたホスピタル dERU が唯一の医療施設となったばかりか、地区一帯が停電していたこともあり、南阿蘇村全体でレントゲンが撮れる場所がここだけという状況でした。後ろの南阿

蘇中学校体育館には、当初 800 名前後の方が避難しておられ、我々の到着前から、徳洲会の緊急医療チームが体育館内に臨時診療所を作って診療をしておられました。我々は、このチームが帰られた 23 日まで共同で診療を行い、最初の 1 週間は避難所内外からの被災者に対応するため、24 時間診療を行いました。幸い重症の方はほとんどおられず、軽症がほとんどで、たまに中等症の方が来られるという具合でした。ただ、断水であったことも原因と思われますが、避難所内でノロウイルスによる感染性下痢やインフルエンザが一時出て、これらの対応も必要でした。また車中泊をしている避難者も多く、定期的な巡回も行いました。その後、徐々に避難者数も少なくなり、また地元の医師が仮設の診療所を立ち上げる目途もついたため、我々は 5 月 15 日をもって診療を終了し、撤収しました。途中、豪雨でテント内が床上浸水したり、寒暖の差が激しかったりと、それなりの苦労はありましたが、約 1 か月の活動期間で 1,070 名の方を診療し、現地の医療の一端を担えたのではないかと思います。この間、当院職員は 4 泊 5 日で交替してチームを継続し、派遣した職員は計 83 名、職種は医師、看護師、薬剤師、放射線技師、臨床検査技師、理学療法士、臨床心理士、臨床工学技士、事務職員など多岐にわたりました。

　我々は撤収しましたが、東日本大震災の例を出すまでもなく、現地の被災した方々にとっては、これから元の生活に戻るまで、長い道のりになるものと思います。我々も緊急時の支援だけでなく、これからの復興期にどのような支援ができるかを引き続き考えていきたいと思っています。

手術室内の様子



テント内でのミーティング

外来棟内の様子